日本の生命は首都には無くて、地方に在る。すべての地方の純美さ、真面目さが、日本の命脈を精神的にも物質的にも支持しているので、東京が日本を支持しているのでは決してない。

江戸の昔、或る有名な侠客は、ボロボロの百姓おやじに訪問を受けた時、わざわざ土間に降りて、低頭平身して挨拶をした。「私どもは娑婆のアブク銭を掴んで喰う罰当りで御座います。お百姓様のような、正真正銘の仕事をするお方の上手に座るような身分のものでは御座いません」

というのがその趣旨であった。これに眩惑されてはならぬ。東京の中で最も美しく、大きく、貴く見えるものでも、地方人の額の汗の一粒に及ばぬ事を知らねばならぬ。

現在擡頭しつつある無産階級の運動でもそうである。それが都会人、殊に東京人の指導下にある間は、将来、結局無価値なものとなりはしまいかと憂慮される余地が十分にある。

同時に、それ等の無産階級の人々が目標とし、規準とする生活が、東京人の生活と同様の意味の文化生活を夢見るものであったならば、それ等の人々の覚醒と運動とは、将来に於て無価値のものとなり終るべき可能性を、充分に持っていはしまいかと疑い得られるのである。

日本の生命は首都には無くて、地方に在る。すべての地方の純美さ、真面目さが、日本の命脈を精神的にも物質的にも支持しているので、東京が日本を支持しているのでは決してない。

江戸の昔、或る有名な侠客は、ボロボロの百姓おやじに訪問を受けた時、わざわざ土間に降りて、低頭平身して挨拶をした。「私どもは娑婆のアブク銭を掴んで喰う罰当りで御座います。お百姓様のような、正真正銘の仕事をするお方の上手に座るような身分のものでは御座いません」

というのがその趣旨であった。これに眩惑されてはならぬ。東京の中で最も美しく、大きく、貴く見えるものでも、地方人の額の汗の一粒に及ばぬ事を知らねばならぬ。

現在擡頭しつつある無産階級の運動でもそうである。それが都会人、殊に東京人の指導下にある間は、将来、結局無価値なものとなりはしまいかと憂慮される余地が十分にある。

同時に、それ等の無産階級の人々が目標とし、規準とする生活が、東京人の生活と同様の意味の文化生活を夢見るものであったならば、それ等の人々の覚醒と運動とは、将来に於て無価値のものとなり終るべき可能性を、充分に持っていはしまいかと疑い得られるのである。

読みやすさ≒余白

前田年昭 t-mae@kobe-du.ac.jp

組版は、文字を扱う技芸であり、デザインの基礎のひとつである。

作例研究（文庫本の版面設計）で学んだように、字送りや行送りをほんの1H（≒0.25mm）変えるだけで誌面に組まれた文字の姿は一変する。

読みやすさとは何か。カッコよさや美しさとは何か。

ここでは余白との関係から考えてみよう。

文字枠の内側の余白

字（ことの間）の余白＝字間

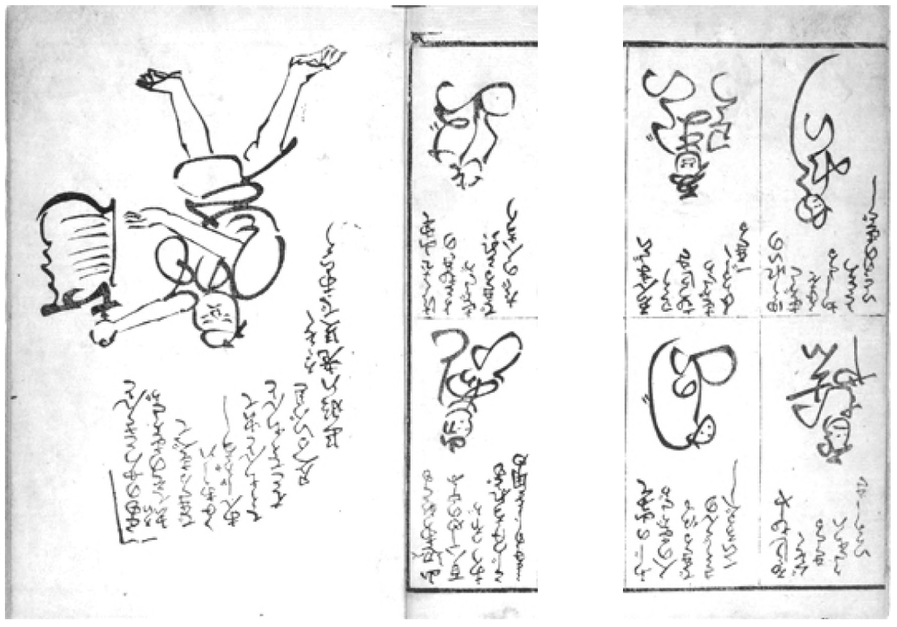
行（ことばの間）の余白＝行間

内側と四隅

版面の余白

行（ことばの間）の余白＝行間

字（ことの間）の余白＝字間



「さあけ一筆ぢゃ」

鼻山人

（右ページの文字）

絵）

てうちん（提灯）、

ともるやいこうそん

（供の奴ぢう）

（左ページの文字）

絵・順に）

山辺ちかひて（山

部赤人、つぎに山

（猿渡山）

さつの山（富士の山）、そんなたいわ

ら（閻魔大王）

師平ぢっしゃう（法

（幽霊）

※うらゝの体の仮名

名は変体仮名